氏　　名	半田　健
学 位 の 種 類	博士（障害科学）
学 位 記 番 号	博甲第　９１０８　号
学位授与年月	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	自閉スペクトラム症児童に対する社会的スキルの欠如タイプに応じた指導の有効性に関する研究

主　　査	筑波大学教授	博士（教育学）	野呂　文行
副　　査	筑波大学教授	博士（教育学）	園山　繁樹
副　　査	筑波大学准教授	博士（教育学）	小林　秀之
副　　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	飯田　順子

論文の内容の要旨

半田健氏の博士学位論文は、自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder: 以下、ASD）の児童の社会的スキルの欠如に対して、獲得欠如・遂行欠如のタイプに応じて指導プログラムを立案することの有効性を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第１章で著者は、先行研究に基づいて、学校場面における ASD 児への社会的スキル指導の効果サイズが小さいこと、そしてその問題を解決するためには、社会的スキルの欠如タイプに関するアセスメントとそれに応じた指導が必要であることを論じている。さらに遂行欠如タイプに対して有効であると想定されるセルフモニタリング手続きの先行研究についても概観している。

第２章で著者は、本研究の目的として、ASD 児の社会的スキルの欠如タイプに関するアセスメントとそれに応じた指導が、通常学級でのスキル遂行に有効であるかどうかを実証することにあると述べている。

第３章で著者は、研究１として公立小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級（以下、情緒学級）の担任を対象とした社会的スキル指導の実態調査について記述している。主な調査内容は、「社会的スキル指導の効果について」及び「指導ニーズの高い社会的スキルについて」であった。調査結果は、社会的スキル指導の効果があると感じている担任が 6 割を占める一方で、場面般化、対人般化、維持の効果を感じる担任が 3 割程度に留まっていたことを示していた。また指導ニーズの高いスキルとしては、「上手に相手の話を聞く」などの 3 種類であったことを著者は報告している。

第４章で著者は、研究２として社会的スキルの遂行が必要となるゲーム活動を用いることで、獲得欠如タイプの社会的スキルの獲得が促進されることを明らかにしている。さらに研究３として、社会的スキル指導とセルフモニタリング手続きを組み合わせることで、学校場面でのスキルの活用や長期的な維

持に効果がある可能性が示されたことを報告している。

第５章で著者は、話の聞き方スキルに焦点を当てて、模擬授業場面を用いた欠如タイプのアセスメントの実施と、それに応じた指導の有効性を情緒学級・通常学級において実証している。研究４においては、獲得欠如タイプの児童に対しては、ゲーム活動を通じた行動リハーサルを含む社会的スキル指導が有効であること、遂行欠如タイプの児童に対しては通常学級内でのセルフモニタリング手続きが有効であることを示している。さらに研究５においては、遂行欠如タイプの児童２名に対して、通常学級内でのセルフモニタリング手続きの有効性を再現している。これらの結果に関して、セルフモニタリングが有効性を発揮した理由として、著者は行動分析学におけるルール支配行動の枠組みにより論述している。

第６章で著者は、遂行欠如タイプの児童に対するセルフモニタリングについて、記録頻度（研究６）及び記録用紙（研究７）が、手続きの効果に与える影響について検証している。その結果として、セルフモニタリング手続きを実施するに当たって、効果的な記録頻度や記録用紙を事前にアセスメントし、対象児童や学級場面に適合するように調整することで、効果的で通常学級内でも実施可能な手続きが特定できることを示唆している。

第７章で著者は、本研究全体の結論を以下のようにまとめている。指導プログラムの汎用化・マニュアル化が推奨されてきたことで、ASD 児の社会的スキルの欠如タイプに応じたアセスメント・指導がこれまで十分に検討されてこなかった。本研究の結果から、模擬授業場面でのアセスメント結果に基づいて対象児童のスキルの欠如タイプを特定し、それに応じた指導を実施することが、社会的スキル指導の効果を高めることにつながる可能性を示唆することができた。特に遂行欠如タイプの場合には、セルフモニタリング手続きが有効であることが示唆された。また記録頻度や記録用紙など通常学級での実施に適合した条件を系統的にアセスメントすることにより、その適用可能性を高めることが可能になると考えられた。最後に課題として、アセスメントや指導を担う専門家をいかに確保していくかという点が挙げられた。

審査の結果の要旨

（批評）

半田健氏の研究は、先行研究において十分な効果サイズが実証されていない学校場面での自閉スペクトラム症の社会的スキル指導に関して、スキルの欠如タイプという観点からアセスメントや指導法を整理し、その効果を実証したものである。半田氏の研究は、ASD 児の社会的スキルが学校場面で発揮されない理由のひとつにスキルの遂行欠如があること、その解決としては社会的スキル指導だけでは十分ではなく、セルフモニタリング手続きが必要であることを示したことは高く評価できる。半田氏の研究は、長期間にわたり通常学級内でデータ収集した結果に基づいており、その成果が教育現場にすぐに活用できる点でも高く評価できる。

平成 31 年 1 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。